海洋白書 2022

White Paper on the Oceans and Ocean Policy in Japan

This Year's Issue

これからの10年が海の未来を決める

笹川平和財団 海洋政策研究所

表紙イラスト：

『海の音』鈴江 俊也 作

全国児童 「ハガキにかこう海洋の夢絵画コンテスト」
第８回文部科学大臣賞受賞作品
（提供：海洋研究開発機構）

ごあいさつ

海洋に関するさまざまな出来事や活動を「海洋の総合的管理と持続可能な利用」の視点にたって分野横断的に整理・考察し、国内外の海洋の諸問題への総合的・横断的な取組みに資することを目指して発行している『海洋白書』を今年もお届けします。2004年に創刊し、今回で19冊目となります。

昨年に引き続きコロナ禍の１年になりましたが、国際社会での海洋問題に関する議論は、欧米を中心にすでに再開しつつあります。2021年秋に英国で開催された国連気候変動枠組条約のCOP26を皮切りに、2022年の２月～３月には、「One Ocean Summit」（フランス）や「国連環境総会」（UNEA5.2）などの重要な会議が対面で開催されました。また、2022年６月には第２回国連海洋会議が予定されています。そこで巻頭では、これらの国際的な議論をリードする国連事務総長海洋特使のピーター・トムソン氏へのインタビュー記事を掲載しました。記事でも触れられているように、海洋問題への対策は待ったなしであり、「これからの10年」の取組みがとても重要となります。そして、巻頭インタビューに続く第１章では、「これからの10年」の鍵となる気候変動問題への対策を、第２章では生物多様性問題や海洋プラスチック問題に関する国内外の動向を取り上げて考察しました。また、2021年５月に東京で開催された北極科学大臣会合を受けて、北極の課題についても紹介しています。

一方で、2022年度に第４期海洋基本計画の議論が本格化するわが国では、海洋産業の振興や海洋の安全の問題も重要な課題となります。そこで、第３章は海洋産業の振興を、第４章は海洋の安全について取り上げました。また、それらの基盤となる人材育成に関する取組みを第５章で紹介しています。さらに、東京2020オリンピック・パラリンピック大会を受けた海洋スポーツの特集記事を第１部の最後に、海洋教育の現場や家庭で「海」を一覧できるポスターを巻末に差し込むなど、今回の『海洋白書』でも、新たな工夫をしました。

今般の、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、日本周辺の海洋安全保障を考えると決して他人事ではありません。また、ロシアが議長国を務める北極評議会の議論が停滞するなど、この問題は、国際的な海洋に関わる議論にも影を落としています。来年の『海洋白書2023』は20冊目を迎える記念号となります。20年間の国内外の海洋政策の状況を振り返りつつ、このような新たな課題も、引き続き取り上げて参りたいと思います。

最後になりましたが、『海洋白書2022』が、皆さまの海洋に対する関心を喚起し、海洋を愛し、海洋について考え、取り組む多くの人びとに最新の情報・知識と示唆を提供することができればこれに勝る喜びはありません。

2022年３月

笹川平和財団理事長　角南　篤

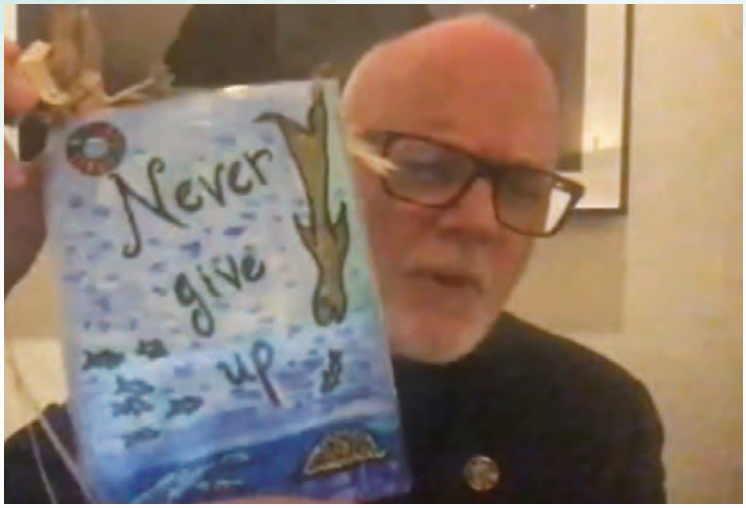
巻頭特集

これからの10年が海の未来を決める

健全な海なくして健全な地球なし

巻頭特集　これからの10年が海の未来を決める

健全な海なくして健全な地球なし



ピーター・トムソン：国連事務総長海洋特使
フィジーの外交官であり、2010年2月よりフィジーの国連常任代表を務めた。2016年9月から2017年9月まで国連総会議長を務め、現在は国連事務総長の海洋特使として海洋問題に係る国際社会の議論をリードする。1980年に臨時代理大使として日本に赴任しフィジー大使館設立の任にあたった。

インタビュワー
竹田有里：環境ジャーナリスト、『海洋白書』編集委員会委員（上）
角南　篤：（公財）笹川平和財団理事長（下）

※このインタビューは2021年12月に行われたものです。

竹田 有里

――　おはようございます、トムソン大使。環境ジャーナリストの竹田有里です。『海洋白書』の編集委員を務めています。ジャーナリストとしては、気候変動のテレビ番組を制作したり、世界中の環境難民を取材したりしています。最近では、日本で育った木を薄くスライスした、このような世界初の木製ストローを作りました。

ピーター・トムソン

本当ですか？　再利用可能ですね。

竹田

――　はい。いま問題になっているプラスチックストローに対応するために開発した新しい製品です。
さて、本日は、笹川平和財団の角南篤理事長とともにインタビューさせていただきます。新型コロナウイルスのオミクロン株の感染者急増が懸念されるなかですが、お元気でお過ごしのことと思います。
早速ですが、先週にコスタリカに行かれたと伺っております。インタビューを始めるにあたり、どのような目的で行かれたのか伺ってもよろしいでしょうか？

トムソン

はい。アルバラード大統領❶が署名した２つの重要な法令に立ち会うために、コスタリカ政府から招待されたのです。１つ目は、SDG14.1 のために私が非常に興味を持っている海洋ゴミに関するもので、２つ目はココス島❷の海洋保護区に関する法令への署名でした。この法令により、コスタリカの排他的経済水域（EEZ）の海洋保護区は 30％に達しました。つまり、各国が 2030 年に設定しようとしている高い目標に、コスタリカは先週、到達したのです。彼らは必要な行動をとっており、私はこの誘いを断ることができませんでした。コスタリカに行って本当に良かったと思っています。そこでは多くの

❶ カルロス･アルバラード。コスタリカの大統領。38歳の若さで大統領に就任した。
❷ コスタリカ沖の島。1982年から海洋保護区に指定。2021年にはその面積を27倍に拡大した。

漁師たちに会い、小規模漁業の組合の会長にも会いました。世界は小規模な職人的漁業から学べることがたくさんあると思います。コスタリカでは非常に充実した数日間を過ごすことができました。

竹田

―― 素晴らしいですね。海を守り、持続的に利用するために取り組まれている様子が良くわかりました。偶然目にしたのですが、英国のグラスゴーで開催されたCOP26[3]で、トムソン大使があるネームプレートを身につけていた写真が、とても印象に残っています。ネームプレートの絵はお孫さんが描いたものだそうですね。もしよろしければ、そのエピソードをお聞かせいただけますか？

トムソン

これがあなたの言うネームプレートです。両側のストラップに付けているのはバンダナで作った鳩です。ネームプレートは「4人の孫娘の祖父です」と紹介しています。裏面には「決してあきらめない」というメッセージが書かれています。会議に登録したすべての人に、自分が誰かの「親」や「祖父母」、「叔父」や「甥」であることを示すネームプレートをつけることで、我われが気候変動問題に懸命に取り組むのは、自分たちのためではない、ということを表現したかったのです。それは私たちの後に続く人たちのためであり、私たちが愛する人たちのためなのです。私たちが、ネームプレートをつけることを気候変動枠組条約の事務局に提案しました。残念ながら、このアイデアを全員に売り込むことはできませんでしたが、私と友人たち数人がこのネームプレートをつけたところ、多くの人の注目を集めることができました。そこで私たちは、1年後にエジプトで開催予定のCOP27に向けて、参加者が進んでこのネームプレートを身につけてくれるよう、ソーシャルメディアを使ったキャンペーンを展開することにしました。COPは世代を超えた正義のために、子どもや孫のためにやっているのだと。

❸ 国連気候変動枠組条約第26回締約国会議（2021年10月31日～11月13日に開催）。

竹田

―― 素晴らしいアイデアですね。他にも、トムソン大使が船の上でバトンを手渡している写真も見つけました。このバトンについてもお話を伺うことはできますか。

トムソン

この「自然のバトン」は、オーシャンレース❹と私の事務所のパートナーシップによるものです。オーシャンレースは世界各地でヨットを走らせて競い合う最も過酷なチームレースと呼ばれています。私は、あるアーティストに流木を使った美しいバトンを作ってもらいました。バトンの中には鉄の筒が入っていて、いま開催されているさまざまな大規模な国際会議の議長たちからのメッセージが入れられています。これは、すべてが「つながっている」ことを象徴しているのです。これまで私たちは、このような会議に「縦割り」で行動していました。しかし、生物多様性の損失、気候変動、海洋の健全性の低下など、すべては人類が地球を不当に扱っているという問題に関連しています。私たちは皆つながって、この問題を乗り越えなければならないのです。そこで、私たちはバトンを渡す「旅」を始めました。数か月前に開催されたIUCN❺の世界自然保護会議のために、ヨットに乗ってバルセロナからマルセイユまで航海しました。そこからCOP26のためにグラスゴーまでは自転車でリレーしました。2022年は、ヨットでフランスのブレストの「ワン・オーシャン・サミット」❻、ケニアのナイロビの国連環境総会（UNEA5.2）、4月開催のパラオの「アワ・オーシャン会議」❼と続き、最後はもちろん2022年6月にポルトガルのリスボンで開催される国連海洋会議で締めくくられる予定です。

竹田

―― 本当に、オリンピックの聖火リレーのようなものですね。さて、やはりCOP26の成果、たとえばグラスゴー気候合意についての見解もお聞きしなければなりません。COP26の成果に満足されていますでしょうか？

トムソン

ご存知のように、会議の最後の段階で石炭火力発電に関する表現が弱められたことについては、誰もが失望したと思います。人類はまだ非常に危険な領域にいるのです。一方で、地球温暖化の軌道については、改善されたように思います。グラスゴーの前は、（平均気温が）3度以上上昇する軌道に乗っていましたが、現在は2.4度程度だと思います。正確な数字は違うかもしれませんが、まだその程度の改善なのです。国際社会は、温暖化が1.5度を超えてはいけないことがわかっているので、やるべきことはたくさんあります。良い方向には向かい始めていますが、まだ人類は赤信号に直面しているのです。
海洋に関しては、今回のCOP26は誇りに思うべき成果でした。つまり、長年の努力の結果、海洋が気候変動枠組条約のプロセスにようやく組み込まれたということです。今後、気候変動枠組条約の事務局は、すべての作業に海洋問題を盛り込み、それについて報告するよう求められています。また、それを実現するようSBSTA❸の議長にも要請されています。2020年のような1回限りの対話ではなく、海洋気候問題について話し合い、それを気候変動枠組条約に報告するためのSBSTAによる毎年定例の海洋対話になりました。大気と海洋が織りなす「気候」が存在する惑星として、こうあるべきだと皆さんも同じ気持ちでいると思います。いまは、海洋は議論の渦中にいるので、やるべきことがたくさんあるのです。

角南　篤

―― お久しぶりです。このインタビューに参加いただきありがとうございます。そして、笹川平和財団へのご

❹ The Ocean Race　スペインのアリカンテをスタート地として、寄港しながら地球を一周するヨットレース。
❺ International Union for Conservation of Nature　国際自然保護連合
❻ One Ocean Summit　2022年2月9日～11日に、フランス北西部のブレストで開催された国際会議。健全で持続可能な海洋の実現に向けて、国際社会を動員して具体的な行動を起こすことを目的とし、EU理事会議長国であるフランスが国連の支援を受けて開催。